

# コピュラ文におけるスペース配列

## Space Configuration of the Copula Sentence

川 添 一 郎  
Ichiro Kawasoe

### Abstract

The purpose of this paper is to describe the type of copula sentence from the point of view of the Mental Space Theory. Copula sentence while having a single structure, has multiple meanings, for example specification, identification, and definition. In previous studies researchers have described the difference between the types of copula sentence in the combination of “Role and Value”. But it just can not accurately described the different meanings. This paper shows that it is possible that the difference in configuration of four spaces-BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT. At the same time, by linking of “Role and Value” and four spaces, it shows the possibility of the development of the theoretical framework.

Keywords: Copula Sentence Specification, Identity,  
Definition Mental Space Space Configuration

## 1. はじめに

### 1.1 コピュラ文とは

コピュラ (Copula) 文とは前項Aと後項Bの2つの項を繫辞 (コピュラ) で結びつけた「A BE B」という形式を持つ構文であり、形態上、大きく「コピュラ文 (A、Bは共に名詞句)」「準コピュラ文 (Aは名詞句、Bは形容詞)」に分けられる<sup>1)</sup>。

(1) コピュラ文：(A、Bは共に名詞句)

a. 女は彼の婚約者だ。 b. は大学生である。 c. 私の家はあそこです。

(2) 準コピュラ文：(Aは名詞句、Bは形容詞)

a. 彼の考え方は独特だ。 b. 彼は親切です。 c. この犬は賢い。

本稿では主に (1) のタイプを取り上げることとする。そこでは共に名詞句であるAとBが繫辞で結びついているため、その意味は「A=B」ということになる。しかし、それを素朴な数学的同一性を表す「A=B」と同一視することはできない。例えば、

(3) a. 太郎は私の弟だ。 b. 太郎は大学生だ。 c. 太郎はカツ丼だ。

を考えた場合、そこでの「A=B」はそれぞれ異なる。

(4) a. 太郎は、誰かというと、それは私の弟のことです。 (指定)

b. 太郎は、どのような人かというと、それは大学生です。 (措定)

c. 太郎は、何を注文したかというと、それはカツ丼です。 (端折り)<sup>2)</sup>

コピュラ文の記述的分析においては「A=B」の内容を精緻に分類することが重要となる。

## 1.2 コピュラ文「A=B」の内容

コピュラ文分析において重要となる「A=B」のタイプ分類についてはこれまで多くの研究があるが、コピュラ文全体の体系を包括的に整理したものとして、英語においてはDeclerck (1988)、日本語においては西山 (2003) がある。本稿ではまず両者を取りあげその共通点と相違点を比較検討したい。詳細は後述するが、Declerck (1988) はコピュラ文を、

- (5) a. Specificational sentences (指定文)
- b. Predicational sentences (措定文)
- c. Descriptively-Identifying sentences (記述的同定文)
- d. Identity statements (同定文)
- e. Definitions (定義文)

と分類し、西山 (2003) は (6) のように整理する。

- (6) a. 措定文      b. 指定文      c. 同定文      d. 同一性文      e. 定義文
- f. 提示文      g. ウナギ文 (端折り文)

(5) (6) それぞれのaとbの内容規定は同一であるが、c dについては規定に相違点がある。さらに日本語コピュラ文を考えるとときにはefgを考える必要がある。

## 1.3 日本語コピュラ文の特徴

日本語コピュラ文特有の問題としては先述の準コピュラ文の存在以外に、「は」と「が」の区別、即ち「AはBだ」と「AがBだ」というコピュラ形式の存在がある。これは「は」と「が」の意味論・語用論の問題という側面を持つが、日本語コピュラ文分析においても「AはBだ」と「AがBだ」のどちらを規範として認定するかという問題がある。

また、上述のように日本語コピュラ文には端折り文という文型がある。それは、

- (7) a. 僕はウナギだ。      僕の、注文した料理／一番の好物は、ウナギだ。
- b. 源氏物語は紫式部だ。      源氏物語の、作者は／空蝉のモデルは、紫式部だ。

のようなものである。(7) が示すようにウナギ文は「Aの Xは Bだ。⇒ Aは Bだ」という意味構造を持つが、その分析において問題になるのは「この省略部分(X)を、Aに読み込むときの過程がどのようなものか」という問題である。従来はそれを「メトニミー (metonymy)現象」として取り上げることが多かったが、本稿では他の現象同様にスペース配列の観点から論じることが可能であると考える。

## 1.4 本稿の構成

以上、コピュラ文の特徴及びその分析において考慮しなければならない問題について概観した。その背景の下、本稿は以下の論考を行う。

考察の端緒としてDeclerck (1988)、西山 (2003) で示されたコピュラ文の分類体系の比較検討を行い、そこに示されている共通点と相違点を整理する。次に本稿が依拠する「メンタルスペース理論」<sup>3)</sup> について概略しつつ本稿で用いる枠組みを紹介する。最後にコピュラ文分析の先行研究の問題点を示し、それが本稿の枠組みで説明できることを示す。

## 2. コピュラ文の全体像

本節ではこれまでコピュラ文がどのように分類・整理されてきたのかについて纏める。まず、英語における Declerck (1988)、日本語における西山 (2003) の一覧を示し、両者の共通点・相違点並びにそれぞれの文型の特徴を整理する<sup>4)</sup>。

### 2.1 Declerck (1988)

- (8) Declerck (1988) のコピュラ文の分類

Specificational sentences	The bank robber is John Thomas.
Predicational sentences	John is a teacher.
Descriptively-Identifying sentences	Who's that man? That man is John's brother.
Identity statements	The morning star is the evening star.
Definitions	A motor car is a vehicle that has four wheels and is propelled by an internal combustion engine.

Declerck (1988) は上述のようにコピュラ文を5つのタイプに分類する。コピュラ文そのものは形式的に一つしかない(「A BE B」)ので、意味的特徴に依存した基準の下で分類せざるを得ない。以下、それぞれのタイプについて略述する。

### 2.1.1 Specificational sentences

Specificational sentencesの特徴は前項Aが変項(variable)であり、その値を後項Bで特定するという点にある。それは

(9) “Who / Which one…?”

の答えの文型と考えることができる。また「前項と後項を入れ替える」ことができる。即ち、「前項と後項の間に結合性(connectedness)を持つ」文型であり、これはPredicational sentencesにはない特徴である。

### 2.1.2 Predicational sentences

Predicational sentencesの特徴は前項Aに関して、その性質、属性、特徴等を後項Bで叙述という点にある。それは、

(10) “What A is?” “A is what?”

の答えの文型であり、このとき、前項Aは外延世界の中の個体を指す「指示的名詞句」である。また、「前項と後項を入れ替えることができない」という特徴も持つ。

### 2.1.3 Descriptively-Identifying sentences

Descriptively-Identifying sentencesとは(聞き手にとって)同定されていない前項Aに対して、後項Bでその属性記述を行うことで対象を同定するという文型である。Declerck (1988) によると、それは、

(11) a. Who won the first prize?      b. John did.  
       c. Who is John?                    d. John is my teacher.

という一連の問いを背景に持つ。(11c) からSpecificational sentencesとの共通性を持つこと、(11d) からPredicational sentencesとの共通性を持つことが分かるようにDescriptively-Identifying sentencesはSpecificational sentencesとPredicational sentencesの2つの側面を持つことになる。ここで問題となるのはこれらの3つの文型の差異をどのように規定するかであるがDeclerck (1988) はこの点に関して詳しく論じていない。これはコピュラ文分析の課題の1つとなる。

### 2.1.4 Identity statements

Identity statementsとは前項Aと後項Bが同一個体であることを述べるものである。

(12) a. The morning star is the evening star.  
       b. Dr. Jekyll is Mr. Hyde.  
       c. The man who killed Smith is the same person as the man who robbed the bank.

が示すようにそれは指定的読み(specificational reading)と同一読み(identity reading)の双方を持つことになる。上記の例では(12b)が指定的読み優位、(12c)が同一読み優位であるが、その際、「指定」と「同定」をどのように考えるのかという問題が残る。

### 2.1.5 Definitions

Definitionsの特徴は次のように纏めることができる。

- (13) a. Specificational sentencesと同じイントネーションパターンを持たない。
- b. 前項と後項を入れ替えることができない。
- c. “NP1 is the following NP2…” へのパラフレーズが可能であるが、変項の指定という意味は持たない。
- d. Definitionsはit分裂文を作ることができない。

Definitionsは後項Bにおいて前項Aの定義を示すものであるが、後項が関係節を含む名詞句であることが多いとする。

Declerck (1988) の分類の特徴は、どのような疑問文に対する回答となるのか等、文の意味機能に着目したものであり同時に前項と後項の入れ替えや分裂文などへの変換の可否についても、それをその分類基準として取り上げている。

### 2.2 西山 (2003)

西山 (2003) は日本語コピュラ文を次のように分類・整理する<sup>5)</sup>。

- (14) 日本語コピュラ文の全体像 (西山 (2003: 122))

	「NP1はNP2だ」	「NP2がNP1だ」
1	措定文 「あいつは馬鹿だ」	
2	倒置指定文 「幹事は田中だ」	指定文 「田中が幹事だ」
3	倒置同定文 「こいつは山田村長の次男だ」	同定文 「山田村長の次男がこいつだ」
4	倒置同一性文 「ジキル氏はハイド氏だ」	同一性文 「ハイド氏がジキル氏だ」
5	定義文 「眼科医とは目のお医者さんのことだ」	
6		提示文 「特におすすめなのがこのワインです」

日本語コピュラ文特有の問題として、「は」と「が」の区別、即ち「AはBだ」と「AがBだ」のどちらを規範とするのかという問題があることは先述の通りである。西山 (2003) は「AがBだ」を規範型、「AはBだ」を派生 (倒置) 型と考える。本稿もこれに従う。

#### 2.2.1 措定文

西山 (2003) は、措定文を「前項Aの性質・属性を後項Bで表すもの」と規定する。そのとき、後項Bは「指示対象ではなく、それが持つ属性を表す」という点で、「非指示的名詞句」であることになる (「叙述名詞句」と呼ぶ)。また、

- (15) a. 石原慎太郎は政治家で作家だ。      b. \*石原慎太郎は政治家と作家だ。

からわかるように、叙述名詞句を連言で繋ぐときは「で」を用いる。さらに、前項と後項を入れ替えることができないという特徴も持つ。以上を纏めると、措定文の特徴は、

- (16) a. 【指示的名詞句】は【叙述名詞句 (非指示的)】だ。

(指示対象ではなく、それが持つ属性を表す)

- b. Bは連言の「で」で結ぶことができ、「と」で結ぶことはできない。
- c. AとBを入れ替えることができない。
- e. Bは形容詞・形容動詞のこともある。

となる。

### 2.2.2 指定文

西山(2003)は、倒置指定文において前項Aを「変項名詞句」と考える。これは、様々な値を取り得るVariableであることを意味し、その意味で非指示的名詞句であることになる。そして実際の文において指定される値を後項Bで示すことになる。従って、倒置指定文は以下のように整理できる。

(17) 【変項名詞句(非指示的)】は【指示的名詞句(指示的/値)】だ。

しかし、西山(2003)は(17)以外に「第二タイプの指定文」を指摘する。それは

(18) 太郎 「あなたは、あの女医ですね」

花子 「いいえ、私は、女医のそばの看護婦です」

というものであり、それが発話されるのは

(19) 「過去の知識と眼前の現実」「映画と現実」「写真と現実の被写体」

のような状況である。そこでは(17)とは異なり、「前項Aは指示的名詞句である」となる。結果、西山(2003)の倒置指定文の特徴は以下の通りである。

(20) a. 基本形(第一タイプ)

【変項名詞句(非指示的)】は【指示的名詞句/値】だ。

第二タイプの指定文

【変項名詞句(指示的)】は【指示的名詞句/値】だ。

- b. 基本形において、Aは非指示的変項名詞句であり、Bはその値である。
- c. 第二タイプの指定文において、Aは指示的変項名詞句であり、Bはその値である。
- d. 「誰が/どれが…であるか」に対する答えとなる。
- e. AとBを入れ替えることができる(「BがAだ」)

### 2.2.3 同定文

(21) a. 山田さんは何でも反対する人だ。 b. 何でも反対する人が山田さんだ。

西山(2003)の同定文(「AがBだ」)の規定は(22)であり、換言すると(23)となる。

(22) a. 前項Aは対象を同定するための特徴を表す。

b. 後項Bは既に同定された対象である個体である。

(23) a. 【指示的名詞句】は【指示的名詞句】だ。

b. Aは指示的名詞句である。Bは記述内容が重要な指示的名詞句である。

### 2.2.4 同一性文

西山(2003)は同一性文を、措定文、指定文、同定文との差異という形で整理する。

(24) ジキル氏はハイド氏だ。

において、後項(「ハイド氏」)は指示的名詞句である。この点で措定文の後項(叙述名詞句)との違いが指摘できる。また、前項と後項を入れ替えることができる点でも措定文とは異なる。同一性文においては、前項(「ジキル氏」)も指示的名詞句であり、その点で倒置指定文の前項(非指示的名詞句)との相違点を確認できる。後項(「ハイド氏」)が指示的名詞句であり同時に世界の個体を指示している点で同定文(指示的名詞句ではあるが、個体指示ではなくその対象が持つ性質・属性を捉える)と異なる。以上を整理すると、

(25) a. 【指示的名詞句】は【指示的名詞句】だ。

b. AもBも指示的名詞句(世界の個体を指示する)である。

- c. AとBが同一の指示対象を持つことを述べる。
- d. AとBは意味を変えずに、「BがAだ」と入れ替えることができる。

となる。同一性文は、Declerck (1988) のIdentity statementsと同じ範疇である。

### 2.2.5 定義文

西山 (2003) は、(26) の例を示し、定義文を (27) のように規定する。

(26) 摂政は、天皇が女性・幼少であるとき、または病気であるときなどに天皇に代わって政治をとる役 (のひと) である。

- (27) a. Aは定義される項、Bは定義する項である (Aの概念内容が、Bで説明される)。
- b. Aは指示的名詞句であるが、Aという概念 (type) を指す (具体的対象ではない)。
- c. 従って、token-referenceではなく、type-referenceである。
- d. 強い方向性がある (「AはBだ」形式が一般的で、「BがAだ」形式はあまり自然ではない)。
- e. 「AはBだ」形式以外に、「AとはBのことである」「AとはBのことをいう」の形式で現れることが多い。

倒置同定文では前項Aは世界の中の一次的個体であるため、(27b,c) によって定義文は倒置同定文、倒置指定文、倒置同一性文と区別される。

### 2.2.6 提示文

西山 (2003) は、(28) の例を示し、提示文の特徴を (29) のように整理する。

- (28) 特におすすめなのがこのメニューです。
  - (29) a. 形式的に「AのがBだ」をとる。
  - b. 後項Bは指示的であり、変項名詞句ではない。
  - c. 「このメニューはそもそも何か」という同定に答える文ではない。
  - d. 後項Bの指示対象が前項Aの指示対象と同一だと言っているわけではない。
- (29) から、提示文が倒置同定文、倒置指定文、倒置同一性文とは異なることが分かる。

### 2.2.7 端折り文 (ウナギ文)

(14) には示されていないが、西山 (2003) は端折り文も日本語コピュラ文の中に含めている。そしてその特徴について以下の主張を行っている。

- (30) ウナギ文「ぼくは、ウナギだ」は、措定文であり、その言語的意味 (ウナギ読み) は、<ぼくは、[∅はウナギだ]>である。そして、コンテキストから、語用論的な補完操作によって∅の中身が補完されれば、たとえば「ぼくは、注文料理はウナギだ」という解釈が得られる。これは、ウナギ文の発話が伝える内容、すなわち表意であって、ウナギ文自体の言語的意味ではない。

西山 (2003) は、端折り文 (ウナギ文) が全体として措定文であることを主張する。即ち、前項Aの値を後項Bで指定するのではなく、後項Bは性質・属性記述であるとする。

## 2.3 Declerck (1988) と西山 (2003) の比較

前節では、Declerck (1988) と西山 (2003) それぞれのコピュラ文の全体像の概要を整理した。そこには共通点と相違点双方が確認できる。以下、その点について論じる。

まず、Declerck (1988) のSpecificational sentences、Predicational sentencesと西山 (2003) の倒置指定文と措定文については両者の規定に大きな相違点はないと思われる。

次に指定文、措定文以外のコピュラ形式に関してだが、Declerck (1988) と西山 (2003) の分類上の対応は以下のようになる。

(31) Declerck (1988)	西山 (2003)
Descriptively-Identifying sentences	倒置同定文
Identity statements	倒置同一性文
Definitions	定義文
	提示文

Descriptively-Identifying sentencesと倒置同定文、この2つのコピュラ形式の分類基準に相違点はない。ただ、例文の扱いについて問題があるように思われる。Declerck (1988) と西山 (2003) は共に、このコピュラ形式を、

(32) 同定されていない前項Aに対して、後項Bでその属性記述を行うことで対象を同定するという文型である。

と考えている。しかし、同定していない人間を“Mike”、「山田さん」と発話することが可能なのだろうか。同定していない対象を発話するとき日本語はメタ形式「～という」「～って」(「山田さんという人」「山田って人」)と用いるのが一般的である。その形式を用いない発話の場合、話者は対象を同定し、それを前提としてさらにその対象の性質・属性を記述するのではなからうか。(32)の「その属性記述を行うことで対象を同定する」部分の「同定する」の定義をより精緻に規定しなければならない。

Identity statementsと倒置同一性文の2つの形式についても基本理解に相違点はない。ただ、ここでのidentity(同一性)の規定が、Descriptively-Identifying sentencesと倒置同定文における「同定」の定義を考えると問題となる。西山(2003)が「同定」と「同一性」に表記を分けたことを前提にして、指示・非指示、世界の中の個体か否か等の観点から「同定」と「同一性」の判断基準を再考する必要があると思われる。

Definitionsと定義文も、Declerck(1988)の「後項が関係節を含む名詞句であることが多い」という指摘は西山(2003)の規定に通じるものであり、両者は共通の分類形式であると考えて差し支えないであろう。

提示文はDeclerck(1988)の分類の中には現れないが、日本語コピュラ文分析においては必要となるものである。本稿の目的がそこにある以上、一つのコピュラ形式として分析対象として取り上げていきたいと思う。

## 2.4 評価

以上、Declerck(1988)と西山(2003)のコピュラ文の分類を比較検討した。それらは系統の異なる2言語の分析結果であり、その共通点は汎言語的なものであると考えて構わないであろう。しかし、同時にいくつか残された問題点がある。

- (33) a. 「同定」と「同一性」の規定上の相違点をどのように定めるのか。  
 b. 各コピュラ形式の相違点を明示する基準とはどのようなものか。

上述の通り、同定文と同一性文の違いはidentityとは何かという問題である。何が「同定」で、どういう場合が「同一性」なのかという点を更に深く論じる必要があるだろう。そしてこのことは、(33b)に繋がる。Declerck(1988)と西山(2003)は現象記述の段階での分類である。我々はそれを受けて、各コピュラ形式の相違点を明示的に説明する枠組みを提示しなければならない。仮にその枠組みが有効なものであれば、それは(14)の中に端折り文を位置付ける際に援用可能となるだろう。

これらの問題は、「同定しているからこそ、その対象の属性記述が可能となる」という一般的理解と「属性記述を行うことで対象を同定する」という規定が論理的にどのように結びつくのかを論じることで先の問題は解決すると思われる。同時に、それは同定文と同一性文の相違点を表す基準とな

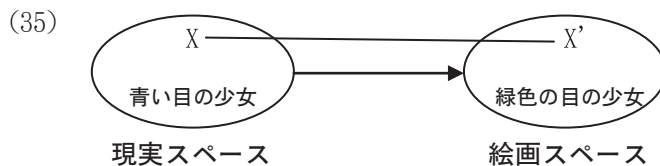
り、そこから各コピュラ形式の相違点を明示的に説明する枠組みの考察にも繋がっていくと考えられる<sup>6)</sup>。以上を受け、次節では本稿でのメンタルスペース理論の枠組みを説明し、その後、それを援用したコピュラ文の再分析を行う。

### 3. メンタルスペース理論

メンタルスペース理論は現実世界の対象物と言語記号との間に「スペース」という意味創造のための構造物を設定し言語分析を行う。例えば「青い目の少女は緑色の目をしている。」ということは現実には成立しない。しかし、

(34) In this painting, the girl with blue eyes has green eyes.

のような状況ではスペースを設定することで同定（意味理解）が可能となる。



即ち、(34) は現実スペースと絵画スペースにという2つのスペース間での表現であり、現実世界では成立しない内容が言語的には表現でき、それが妥当性を持つ状況（即ち、「言語表現」によって成立した状況）を聞き手はスペース配列（構築）の下で理解しようとするという我々の創造的意味理解のメカニズムに着目した理論である。

メンタルスペース理論における「スペース」の概念は研究者によって様々であり、現段階では合意された概念規定はないが、本稿では以下のように規定しておく。

(36) 言語を現実世界と対応付けるインターフェース機能を持つ心的構築物。名詞句ではその名詞句が持つ内包と述定により同定される一つの外延を持つ最小単位<sup>7)</sup>。

但し、(34) で「絵画スペース」を導入したことから分かるように、それぞれの場面での「〇〇スペース」を設定するとスペースそのものが際限なく広がることになり、結果、アドホックで説明的妥当性に欠けるものになってしまう。そこで、本稿では(36)に加えて、機能的側面からそれらを内包した4つのスペースを導入することを提案する<sup>8)</sup>。

#### 3.1 4つのスペース

##### 3.1.1 発話場—BASEとV-POINT

メンタルスペース理論を用いたコピュラ文分析の問題の1つに「スペースをどの位置に設定するか」というものがある。スペースは例えば「現実スペース」の場合でも「現実」そのものではない。その中に話し手・聞き手が発話理解のためにその都度設定したものである。しかし、一方で話し手・聞き手の現実の立ち位置の存在も忘れてはいけない。本稿ではそれを「発話場」という視点から2つのスペースに分ける。これは<直示表現>の処理の対応に還元できる。即ち、直示表現と非直示表現の区別であり、「文上に現れない、直示表現と非直示表現の区別をいかにして分析のモデルに取り入れるか」という問題ともなる。本稿ではそれを<スペース属性>を考慮することで機能的に対応したいと考える。

発話者が発話する場、これを「発話場 (Speech Field)」と呼ぶことにする。発話場はまず発話者の「イマ、ココ、ワタシ」というダイクティック (deictic) などからスタートする。しかしながら、発話場はそこに留まるものではない。発話者が想定した「信念」「絵画」というような様々な観念上の発話場を話者は自由に想定し、その中での理解を発話する<sup>9)</sup>。本稿では前者をBASEスペース (BASEと表記) と呼び、後者をVIEWPOINTスペース (V-POINTと表記) と呼ぶことにする。



(37) 発話場に関する二つのスペース

BASE : 発話者の、「今、ココ」というスペース内での立ち位置

V-POINT : 発話者の、観念上想定されたスペース内での立ち位置

### 3.1.2 述定と計算場—EVENTとFOCUS

「スペースの属性に配慮したモデルを用いることにより指定文並びにコンピュータ文の精緻な分析が可能となる」というのが本稿の主張である。この点に関して前節では発話場という概念を立て、BASE/V-POINTという概念装置を仮定した。しかしスペースの属性はそれ以外にもある。本節ではこの点を論じる。

まず、言語表現が表す命題内容が表示されるスペースがある。換言すれば<述定部が描いている出来事・対象等が表示されているスペース>である。これをEVENTスペース (EVENTと表記) と呼ぶことにする。

もう1つの属性はFOCUSスペース (FOCUSと表記) である。これは言わば<文の意味の計算場、文命題が描く内容の中心部分>である。他のスペースが発話場と述定内容を表す言わば「固定した」スペースであるのに対して、FOCUSはそれらのスペースのどれを話者が中心に述べようとしているのかを示すものである。その意味で、コンピュータ文では「指定」「措定」の区別に応じてFOCUSの位置は決まる。FOCUSがどの位置にあるのかがコンピュータ文下位類の違いの説明に大きく関わると本稿は考える。

以上、本稿では4つの属性を持つスペースを仮定し、それらは(38)のように纏められる。

(38) 本稿におけるスペース仮説

a. 文解釈におけるメンタルスペースは属性の違いにより4種類に分かれる。

それは、BASE、V-POINT、EVENT、FOCUSであり、以下のように規定できる。

b. BASE : 発話場としての現実スペースである「イマ、ココ、ワタシ」

V-POINT : 発話場としての観念スペース

EVENT : 述定で描かれる内容

FOCUS : 文の意味の計算場、文命題が描く内容の中心部分

c. 文解釈はメンタルパスで結ばれたスペース配列関係で記述することができる。

## 4. コンピューラ文におけるスペース配列

### 4.1 デフォルト

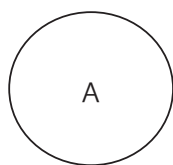
コンピュータ文は「前項Aを後項BによってX(指定、措定、同定…)する」という文型である。従ってデフォルトとして

(39) a. 前項AにV-POINTを置く。 b. そのときのBASEはAにある。

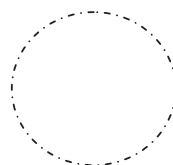
c. FOCUSとEVENTはこの段階では登場しない。

となる。その時のスペース図式は(40)となり、それをデフォルトとしてそこからそれぞれのコンピュータタイプによってスペース配列が展開されることになる。

(40)



V-POINT  
BASE

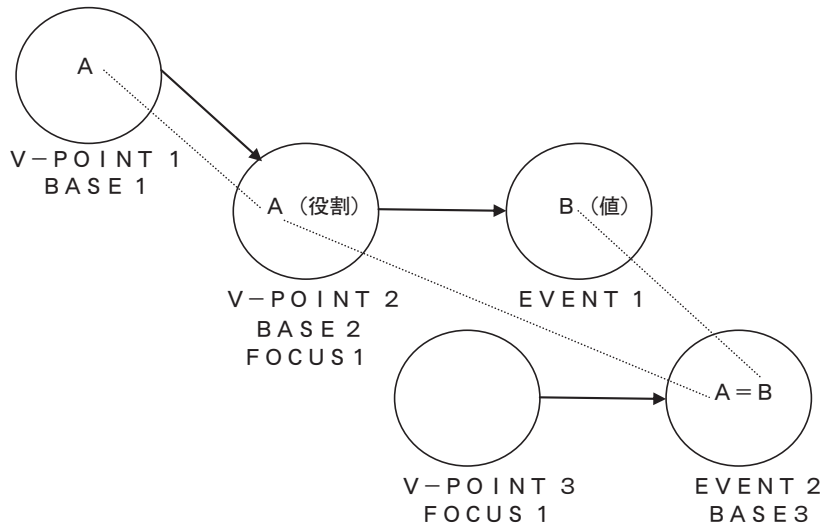


FOCUS/EVENT

## 4.2 指定と措定

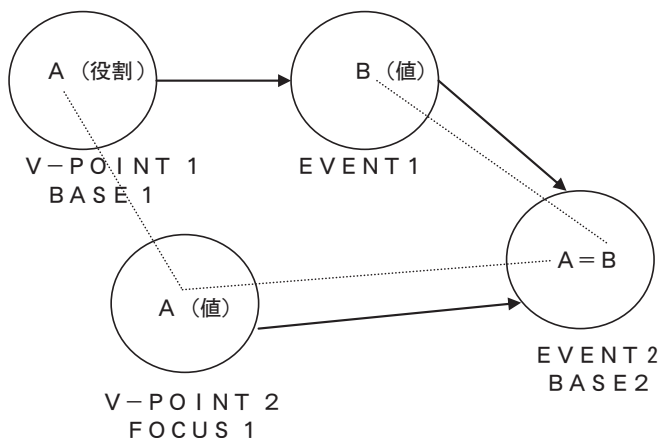
指定の場合、デフォルトに対して後項Bによって値を付与する。通常、前項Aは「変項」即ち、非指示的であるのでBASEの位置にV-POINTがとどまる。また、それは「Aは何か／誰か…」を問うものであるのでFOCUSはAの位置にある。そこにBが指定されるのでBの位置にEVENTが来る。最後にBの位置にAが移動し指定文のスペース配列(41)が成立する<sup>10)</sup>。FOCUSはV-POINTの位置にとどまる<sup>11)</sup>。

(41)



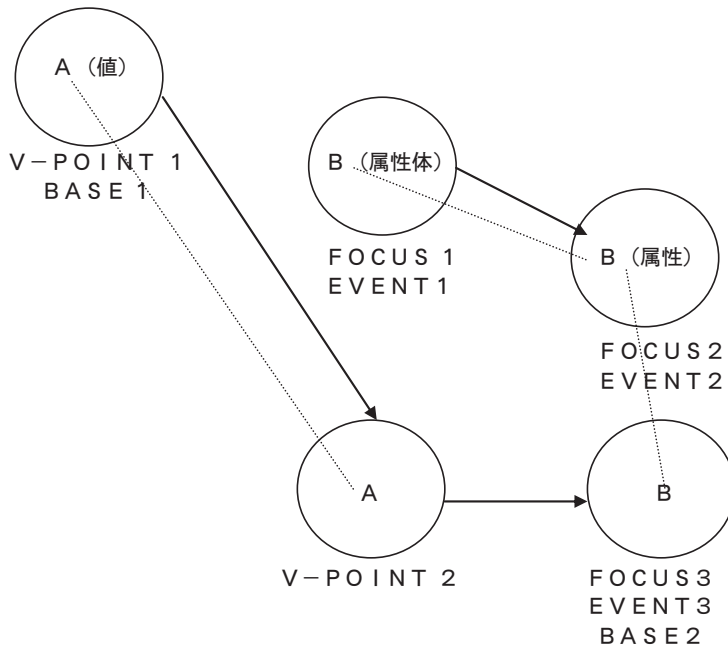
第二タイプの指定文の場合、前項Aは「指示的」である。即ち、前項Aは「世界」の中の実在を指している。従って、デフォルトからのスタートは通常の指定文と同様だがまずはAの、世界の中での対応物(但し、それはあくまで役割レベル)を理解ことになる。当然、視点はそこに移る。次にEVENTが導入される。そこからその発話で求められる値を特定されスペース配列(42)が成立する。BASEは最終的にEVENT 2の位置に移動するが、FOCUSは通常の指定文同様V-POINTにある<sup>12)</sup>。

(42)



措定文は「特定された前項Aに、それが持つ様々な属性の中でその発話場に適切なものを割り当てる」という文型である<sup>13)</sup>。従って、Aに関する属性の集合体に着目し、その後1つの属性を選択する。従って属性の選択という計算があるため、BにFOCUSがあることなる。AとBとの結びつきは同定ではなく属性付与である「A=B」という関係は成立しない。またA Bは入れ替えられないので間スペース表現であることがわかる。

(43)

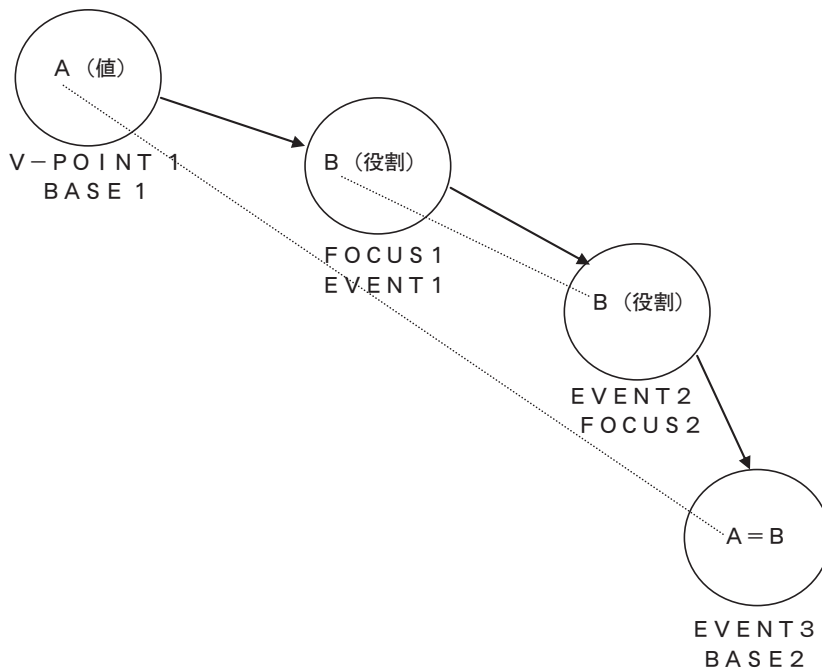


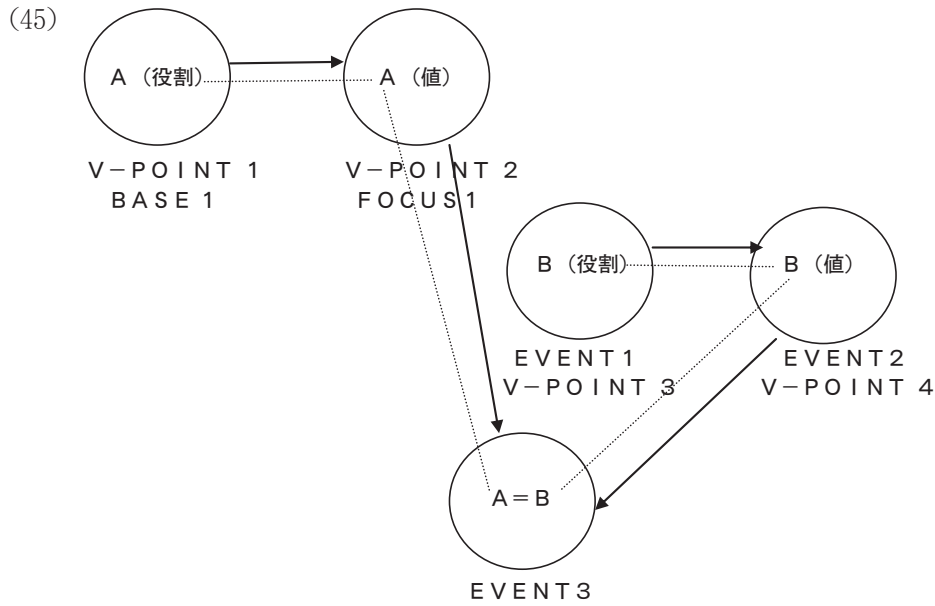
### 4.3 同定と同一性

(22) (23) に示したように同定文ではBは対象を同定するための特徴を表す。従ってV-POINTは同定される対象であるAの位置にあるが、FOCUSはBの位置にあることになる（その意味で措定文に通じる）。そのときBはAの属性を表すためそれは役割となる<sup>14)</sup>。また、A、Bは共に指示的であるという特徴を持つ。しかし同定文ではAの属性を表すBによって対象Aを同定するという特徴を持つ（その意味で指定的である）。そのためメンタルパスは「B→A」という方向をとる。

一方、同一性文においてもAとBは指示的である。BはAの属性としての値ではなく個体である。それは通常固有名詞であり固有名詞は「値を一つしか持たない役割」という特徴を持つが、この場合役割によって同一性を示すのではなく、あくまで値を通して同一性を示す<sup>15)</sup>。従って、まず役割から値へとV-POINTが移動し、そこから同一性を示すことになる。(44) が同定文、(45) が同一性文のスペース配列である。

(44)

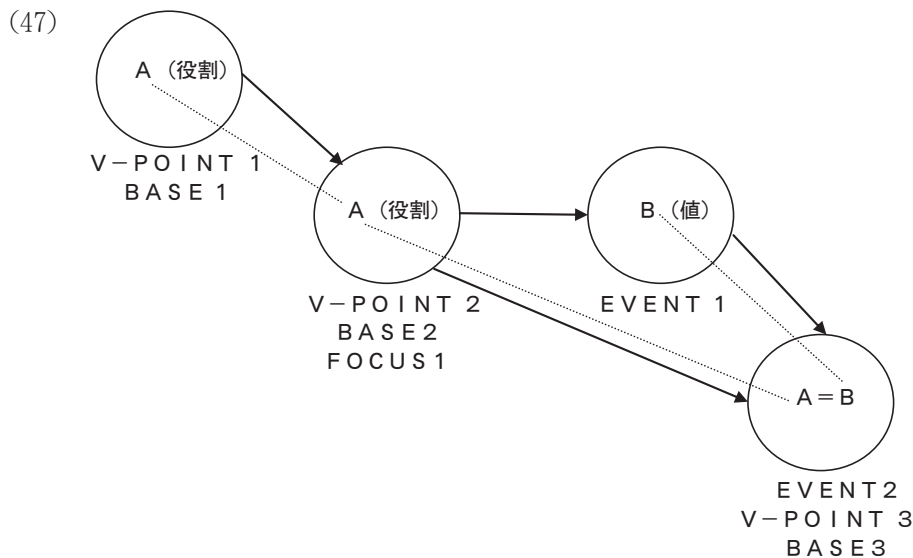
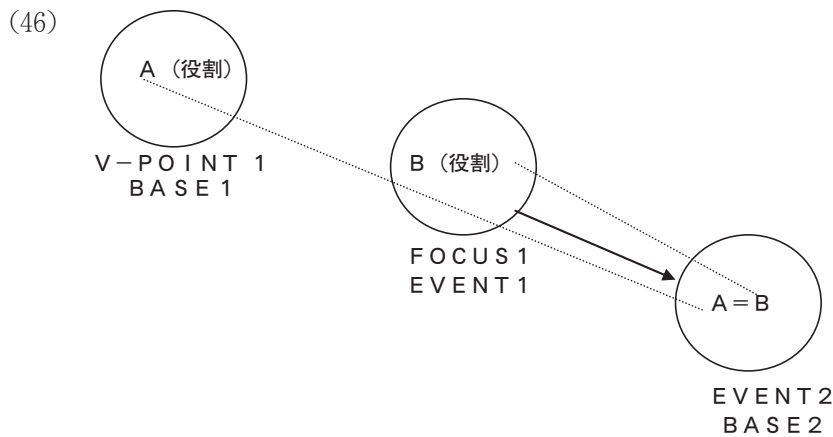




#### 4.4 定義・提示と端折り

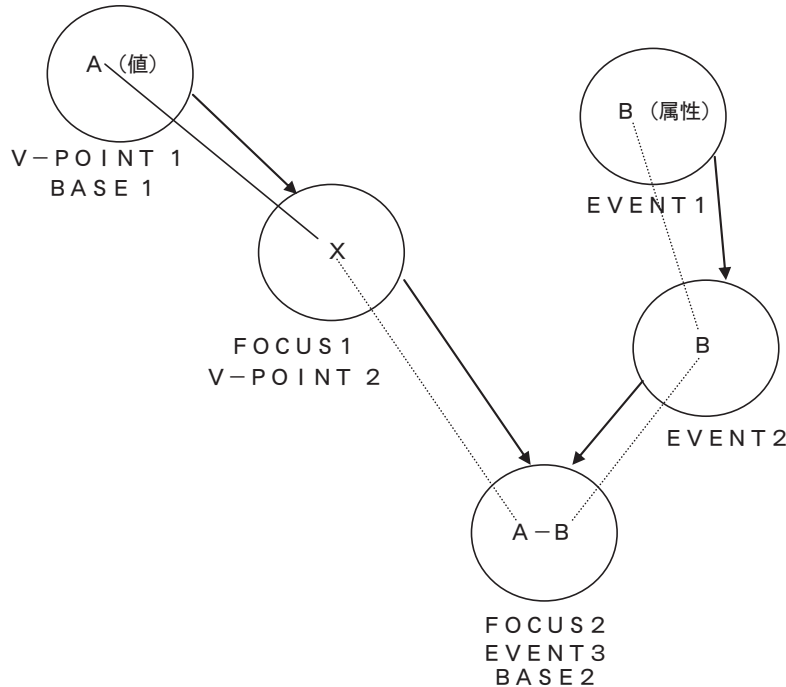
定義文は前項Aに対して後項Bがその内容を規定するというものであるがその特徴はカテゴリー指示である。従って値は登場しない。また同定文と同様Aの属性を表すBによって対象Aを規定するという特徴を持つためメンタルパスは「B→A」という方向をとる。

提示文は常に現場指示（直示）という特徴を持つ。また、Aは役割でありそれに直示的な値を付与するという特徴を持つ。(46)が定義文、(47)が提示文のスペース配列となる。



端折り文は前項Aと後項Bが直接結びついたものではない。「AのXはBだ」という意味的介在を通して両者は結びついている。その意味的介在にFOCUSがあることになる。またそれは措定文の一種である。従って、端折り文の特徴を一言で纏めると「意味的介在項であるXにFOCUSがある措定文」ということになる<sup>16)</sup>。そのスペース配列は(48)となる。また入れ替え可能であるので単一スペース表現となる。

(48)



## 5. 終わりに

以上、本稿はコピュラ文の様々なタイプの異なりをメンタルスペース理論のスペース配列で記述することを試みた。結果、同形式異内容の文型、その意味の違いを1つの枠組みで記述できる可能性を示すことができたと思われる。また、これまでテンス・アスペクト問題にのみ適用されていた4つのスペースとその配列がそれ以外の分野にも応用可能であり、理論的展開の可能性を示唆できたと考える。

しかしながら残された問題は多い。その一つがスペース移動の規則性である。デフォルトの発話場であるBASE/V-POINTからどのような規則性の下でEVENT/FOCUSが派生され、それらが展開しスペース配列が生まれるのかについては言及できなかった<sup>17)</sup>。次回はこの点について考察することにする。

- 
- 1) Bの位置に形容詞が来る場合もそれを英語で表すと「A is …」という形でBE (copula) が現れコピュラ構造を持つことになりコピュラ文の一種となる。
  - 2) 「端折り」という用語は三上(1953)に準じる。奥津(1978)以降一般には「ウナギ文」という用語が定着しているが、意味の本質を表す「端折り文」を本稿では使用する。
  - 3) メンタルスペース理論においては名詞句分析では「役割 (role)」「値 (value)」「スペース (space)」を、テンス・アスペクト分析は4つのスペース配列を用いる。これは理論的整合性の問題が残っていることを示す。本稿はその統一も視野に入れている。
  - 4) より詳細については川添(2011: 53-61)を参照されたい。
  - 5) ここには示されていないが西山(2003)は端折り文もコピュラ文の一種と考えている。

- 6) これらの問題についての一連の研究の嚆矢として本稿は位置付けられる。
- 7) 即ち、単一の外延とそれを同定する必要最低限の内包を有する心的最小単位である。
- 8) Cutrer(1994)は4つのスペースによるテンス・アスペクト分析の分析であり名詞句分析には言及していない。一方、Fauconnier(1985)は名詞句の分析であるが4つのスペースは登場しない。本稿は両者を結び付けることで理論的発展が可能となると考える。
- 9) 発話者の立ち位置（立場）を日本語研究の中で最初に取り入れたのが時枝（1941）であり、本稿はこれらの先行研究をメンタルスペース理論中で問い直すものである。
- 10) スペースの後ろの数字（例えば、BASE 1、2）はスペースが登場した順番を表す。
- 11) FOCUSがV-POINTの位置にとどまるのは指定文が前項である変項の値を問う文型であるからである。即ち、焦点はあくまで前項Aにあることになる。
- 12) 西山（2003）が（19）（20）に示した根拠がここでのスペース配列の最終位置の構図から理解できる。（41）の最後のV-POINT 3は中身のない「空」（単一スペース）であり（42）は項を持つ（間スペース）表現となる。尚、紙幅の関係上、（42）以降のスペース配列はデフォルトを省略することにする。
- 13) 但し、AとBとは直接的に結びついているわけではない。指示的名詞句でありスペースを介在して間接的に結びついていることになる。（45）はその点を図式化している。
- 14) この、役割によって対象を規定するというのが同定文の特徴となる。
- 15) 固有名詞は役割と値が1対1対応する「恒等関数」的名詞と呼ぶべきものである。
- 16) 従って、端折り文は指定文のような項と項との一致（ $A=B$ ）というものではない。稿のスペース配列ではそれを「 $A-B$ 」という形で表示する。
- 17) 今回はコンピュータ文全体像の記述を主眼に置いた。次回以降はそれぞれのタイプを一つ一つ掘り下げそこでの規則性を抽出し、スペース配列の規則の体系構築に努めたい。

## 参考文献

- 今井邦彦（2000）「関連性理論とはどういう理論か」『英語青年10』pp2-6 KENKYUSYA（2001）『語用論への招待』大修館書店
- 井元秀剛（1995）「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」『言語文化研究』24 pp.97-117 大阪大学言語文化研究科（2005）「指定文の主語は「役割」なのか「変項名詞句」なのか」フランス語談話会「コンピュータ文の意味と解釈をめぐって：<名詞句の指示>の観点から」
- 奥津敬一郎（1978）『「ボクハウナギダ」の文法』くろしお出版
- 川添一郎（2009）「指定文における役割・値・スペース」『人間環境科学』第18巻 pp13-31 帝塚山大学人間科学研究科（2011）「コンピュータ文とメトニミー」『神戸国際大学 紀要題』81 pp.51-79 神戸国際大学学術研究会 神戸国際大学
- 坂原 茂（1990）「役割、ガ・ハ、ウナギ文」『認知科学の発展』3 pp.29-66 講談社
- 東郷雄二（2005）「指定文における名詞句の意味解釈と複数スペース仮説」フランス語談話会「コンピュータ文の意味と解釈をめぐって：<名詞句の指示>の観点から」
- 時枝誠記（1941）『国語学原論』岩波書店〔復刊 岩波書店 2007〕
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』くろしお出版
- 三上 章（1953）『現代語法序説-シンタクスの試み』刀江出版（復刊1972くろしお出版）
- Cutrer, L. Michelle (1994) "Time and Tense in Narrative and in Everyday Language" PhD diss., University of California, San Diego
- Declerck, R. (1988) Studies on Copular Sentences, Cleft and Pseudo-clefts. Holland/USA :Leuven UP
- Donnellan, k. (1966) "Reference and Definite Description" *Philosophical Review* 75:271-301
- Fauconnier, G.(1985) Mental Spaces, Cambridge, Mass. : MIT Press
- Haiman, J (1980) "Dictionaries and Encyclopedias" *Lingua* 50